

Title	古市晃著：『倭国：古代国家への道』（講談社現代新書）：21年9月刊
Author	鷺森, 浩幸
Citation	市大日本史. 25 卷, p.134-135.
Issue Date	2022-05
ISSN	1348-4508
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

古市晃著 『倭国 古代国家への道』
（講談社現代新書） 21年9月刊

鷺森浩幸

序章で全体の構想が示される。シンプルで要領よく提示されるので、理解しやすい。「倭と称された日本の列島社会における国家の形成過程を、五・六世紀を中心に検討し、その特徴を明らかにすること」が本書の目的である。いわゆる大和王権がいつどのようにして確立したのかは現在でも大きな研究課題であるが、本書のテーマはそこでなく、王権への権力集中（専制化といわれたりするが）の問題である。現在、この点について大きく二つの潮流がある。本書の記述も参考にしながら、まとめると次のようになる。ひとつは五世紀後半の雄略天皇の頃に画期を置く考え方で、前方後円墳の巨大化、埼玉県稲荷山古墳の鉄剣・熊本県江田船山古墳の大刀の銘、宋への使節派遣などを根拠として論じられてきた。もうひとつは継体・欽明天皇の時期に画期を求める考え方である。朝鮮半島の情勢や部民制の確立・屯倉制の進展などの論点がある。

本書のスタンスは「五世紀には、じつは倭王の王統はいまだ一つにまとまってさえいない状況にあった」「欽明こそは、父が拡大した権力基盤と、母の持つ前代以来の権威の双方を備えた新しいタイプの倭王であった。欽明以降、倭王の地位はようやく血縁により安定的に継承されるようになる。世襲王権の成立である」といった記述から、前

掲のうち第二の考え方に依拠することが明白である。この点こそが本書、および最近の古市晃の研究の主要なモチーフであり、本書の内容そのものである。以下の章でこの点が詳しく論じられていく。

第一章「五・六世紀の王宮を探る」が当時の王統に関する検討で、王宮が鍵になる。王族の名と王宮には密接な関係があり、名前から王宮が論じられる。王宮の分布に関して、長谷・磐余・石上といった奈良盆地南部の倭王の宮が固定的に置かれた場所のそれらを中樞部王宮群、それ以外の奈良盆地北部・京都盆地南部・大阪湾岸の王宮群を周縁部王宮群として分類する。たとえば、王宮と王名の関係は「名代・子代に限られるものではない」、王族の名が養育に当たった氏族名によるとされる点について、「氏族名にもとづく命名の習慣が定着するにはかなりの時間を要した」、部の制度化について、通説では六世紀以降に画期を求めるが、「王宮を結節点とする王族と人びとの支配・従属関係は、部民制としてそれが固定される以前から存在した」。このように従来の基本的な制度的枠組みを軽くこえてるように見える。

第二章「王とはどのような存在か」で、五世紀頃の王権に関する考察が示される。結論は先にも一端を紹介したが、仁徳系と允恭系の二つの王統が併存して対立関係にあり、いったんは勝利した允恭系の王統も最後には断絶した、周縁王族の反乱伝承から、彼らも倭王（中樞王族）と共に王権を構成したが、対立的な性格も内包していたと主張する。「不安定で流動的な状態」が強調される。

第三章「五世紀の中央支配権力―ゆるやかな連合関係」が王族を支える豪族をテーマとする記述である。大阪湾岸を中心に葛城・吉備・紀伊の勢力および海人集団からなる政治的連合体がここでの主役である。ホムチワケ王という非常に興味深い説話がともなう、個性的な人

物が『古事記』『日本書紀』に登場するが、その物語を軸に葛城勢力は「有力な豪族であると同時に、周縁王族の一員としても認識される存在であった」とされ、ホムチワケは葛城出自の王と位置づけられる。葛城の豪族の問題は従来、王権の外戚としての地位からさまざまに論じられてきた。ホムチワケ王という新しい回路を使った考察である。

ここまですべて五世紀後半頃までの、大和とその周辺を舞台とする王権と豪族たちの政治史であり、大きなテーマは王権の不安定で流動的な性格の強調であると読み取れる。この論述の次に位置するのが終章「新王統の成立と支配制度の確立」であり、それを先にみておく。継体天皇の登場に大きな意義が与えられる。継体天皇の登場は「近江を軸に北陸・東海に展開する広域の勢力と、従来の中央支配権力の結合による、それまでにない強力な支配権力の誕生」であった。継体は「それまでの倭王が果たすことのできなかった」淀川水系の直接支配を目指したとされる。そして、それに続くのが最初に言及した欽明天皇である。このような変化と結び付けながら、蘇我氏の台頭、国造制・ミヤケ制（中央支配権力と地域社会の間で結ばれる支配・従属関係の制度化」とされる）、より包括的な支配機構としての部民制が取り上げられる。また、背景にある大きな要因として、朝鮮半島における情勢の流動化とそれに伴う倭国の利権の喪失、社会の分断と仏教の導入といった論点が提示される。ここでストーリーは完結である。現在、問題のない共通認識とはいえないだろうが、このような見方は研究の主要な潮流といえるだろう。

第四章「中央支配権力と地域社会―瀬戸内沿岸を中心に」は地域社会と支配権力の関係を具体的に考察した章である。大阪湾岸から北九州までの瀬戸内海沿岸地域が対象であるが、特に播磨の飾磨と周防の

佐波という二つの港湾の状況が検討される。飾磨では『播磨国風土記』の品太天皇の伝承を取り上げ、品太天皇の原型をホムチワケ王と解釈し、葛城勢力とのつながりを看取する。これまで、品太天皇は応神天皇とされてきた。また、応神天皇（ホムタワケ）とホムチワケの関係も複雑である。佐波について、吉備や紀伊の勢力のこの地域の勢力との交渉が論じられる。これら葛城・吉備・紀伊の勢力の活動の次に来るのが、六世紀の蘇我・物部氏の活動で、その特徴は「倭王により密着した形で権力を作り上げていった」ことである。

第五章「『播磨国風土記』の歴史世界」はさらに詳細に地域社会を論じた章である。『播磨国風土記』に多くの伝承を残す伊和大神を取り上げ、それが播磨国造による播磨の支配を反映するものと結論される。また、但馬や吉備の勢力の播磨への侵入を論じ、その背後に葛城の勢力の存在を読み取る。

本書の概略は以上である。通読してみても、国家の形成過程を追う研究なのであるが、主役は葛城・吉備・紀伊の勢力（と難波の王族）の連合体であるように読めた。あとがきにもあるように、本書の前提として古市『国家形成期の王宮と地域社会』（塙書房 二〇一九年）があり、本誌二四号をはじめ、主要な歴史研究誌にすでに書評があるので、ぜひ参照されたい。（帝塚山大学文学部）

酒井紀美著『人物叢書 経覚』
（吉川弘文館）19年12月刊

服部光真